

## 共通テストの英語における英語民間試験導入の効果と課題（2）

—広島大学におけるみなし満点方式を申請した志願者分析より—

永田 純一, 三好 登 (広島大学)

2021 年度入学者選抜における英語資格・検定試験の申請状況とその分析結果を報告する。2019 年度から 3 年目を迎えたみなし満点方式による入試結果の分析からは、学部ごとに申請状況に大きな差があること、さらに、志願者全体でも資格・検定試験の種別ごとに申請数が大きく異なっていることがわかった。また最も申請者が多い英検について CSE スコアとの関係を分析したところ、共通テスト「英語」得点との一定の関係が見いだされた。

キーワード：4 技能, 英語資格・検定試験, みなし満点, 大学入学共通テスト

### 1 問題の所在

本研究は、入学者選抜における入試成績の一部である大学入学共通テスト「英語」の得点に、英語民間試験（以下、英語資格・検定試験と呼ぶ）の成績を活用した効果と課題について、竹内・永田(2021)の分析結果に引き続き報告するものである。

大学入試における英語資格・検定試験の活用については、英語指導方法等改善の推進に関する懇談会（文部科学省, 2001）、教育再生実行会議第三次提言「これからの大学教育等の在り方について」（教育再生実行会議, 2013）、中教審答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育, 大学教育, 大学入学者選抜の一体的改革について」（中央教育審議会, 2014）、文部科学省「高大接続改革の進捗状況について」（文部科学省, 2016）等、これまで 20 年近くに渡って提言が繰り返されてきた（竹内・永田, 2021: 332）。さらに大学入試英語成績提供システムの中止が決定された後、「大学入試のあり方に関する検討会議」が設置され、2021 年 7 月に提言がまとめられている（大学入試のあり方に関する検討会議, 2021）。

このように様々な議論がなされる中、広島大学では 2016 年度入試以降、英語資格・検定試験の活用を続けている。この取り組みの導入過程については、杉原・永田・高地（2019）において詳しく報告している。当初、入試における評価レベルと各資格・検定試験との対応については、独自の対照表を作成し利用を開始した。当時の AO 入試等から利用を開始し、その後一般入試での活用へ拡大することとなったが、この時には文部科学省からより多くの種類の資格・検定試験を含めた新対照表が公表されていたことから、この新対照表の利用へ移行した。

2019 年度入試からは、一定の条件のもと、大学入試センター試験（以下、センター試験と略す）の外国語（英語の「筆記」・「リスニング」）の得点を満点とする「みなし満点方式」を開始した（2021 年度入試では大学入学共通テスト（以下、共通テストと略す））。ここでいうみなし満点方式とは、「出願時に CEFR 相当レベル B2 以上を証明する書類等の提出を行った場合、共通テストの外国語（英語）の得点を満点とする方式」であり、英語が得意な受験生のための希望者優遇制度として、一般選抜、総合型選抜、学校推薦型選抜においてセンター試験（2019 年度入試）を課す全学部の全募集単位で活用を開始した（竹内・永田（2021））。

なお、この方式では出願要件として課しているのではなく、有資格者が希望（申請）した場合に適用するものであることを付記しておく。

2021 年度入試からは、センター試験に代わり共通テストが実施されることとなり、英語の素点もリーディングとリスニングそれぞれに 100 点ずつ、合計 200 点となり、センター試験におけるリーディング/リスニングの比率（リーディング：200 点、リスニング：50 点）とは異なってリスニングにも重きが置かれるようになった。このような大学入試システムの制度転換に伴い、現在設定している大学入学共通テスト「英語」を満点とする基準設定についても、改めて検証を行う必要があると考えられる。本論文では、検証の一部として 2021 年度入試の受験者のデータを対象とした分析を行ったので、その結果と考察を示す。

### 2 分析対象

竹内・永田（2021）においては、2019 年度及び 2020 年度入試におけるみなし満点方式に関する分析

表1 2019～2021 年度の広島大学の入試におけるみなし満点方式申請者数と志願者に占める割合（全ての選抜区分の総計）

入試年度	申請者数	志願者に占める割合
2019	398	4.9%
2020	448	6.4%
2021	762	11.8%

を報告した。本報告では引き続き 2021 年度入試の分析結果を報告する。なお、2021 年度からは「みなし満点方式」における満点となる対象は、大学入試センター試験ではなく、大学入学共通テストに置き換わっている点には注意が必要である。本報告は、大学入学共通テストにおける「みなし満点方式」の妥当性の検証にも資すると考えている。表1に、2019～2021 年度入試の 3 か年におけるみなし満点方式の申請者数と志願者に占める割合を示す。

### 3 分析結果と考察

#### 3.1 一般選抜合格者における分布

##### 3.1.1 みなし満点方式申請・非申請合格者数

本節では、特に一般選抜をその分析対象とする。表2は、みなし満点方式申請・非申請合格者における一般選抜の共通テスト英語教科得点の記述統計量を示したものである。一般選抜におけるみなし満点方式申請・非申請合格者数をみると、まず全学で 259 名・2,044 名となっており、当然のことながら数は少ないもののみなし満点方式を申請したものは存在していることがわかる。しかしこれを学部別にみると、みなし満点方式を申請するものが最も多いのが A 学部（医歯薬系）で 61 名（24%）・159 名（7%）である一方で、最も少ないのが I 学部（理工農系）4 名（2%）・76 名（3%）となっており、学部によってみなし満点方式を申請するものが大きく異なっている現状が把握できる。これは学部特性の違いによるものが大きいと思われる。すなわち A 学部は元々、英語も含めた学力レベルが高いため、それを反映して利用者が多いものと考えられる。特にこれらみなし満点方式の申請者が多い学部において、申請しないものについては当日の共通テストでより一層の取り組みを行う必要があることを示唆している。しかし I 学部では、英語は課しているものの、英語に関連した学科やプログラムがあるわけではないため利用者が少ないものと想定される。

##### 3.1.2 みなし満点方式申請・非申請合格者における共通テスト「英語」得点（Reading+Listening）

ここではみなし満点方式申請・非申請合格者における共通テスト「英語」得点の最高点・最低点・平均点・標準偏差について全学の状況をみていきたい。まず、みなし満点方式を申請したものに関して、全学で最高点 197 点、最低点 88 点、平均点 157.8 点、標準偏差 23.4 となっている。当日の共通テストでいかなる点数を取得しても、みなし満点方式を申請したものは自動的に「英語」得点が満点となることが事前に決まっている。それにも関わらず、当日の共通テストで極めて高い得点を取得し、真面目に取り組んでいるものがある一方で、そうではないものも多く、平均点から散らばりがみられる。すなわち、みなし満点方式を戦略的に活用して合格している受験生もいる、ということである。

これに対して、みなし満点方式を申請していないものについては、全学で最高点 199 点、最低点 78 点、平均点 145.2 点、標準偏差 19.3 となっている。先にみたみなし満点方式を申請したものと比較すると、最高点は若干高くなっている一方で、最低点や平均点は低くなっている。つまり、申請できるならば申請して損はない以上、申請者は非申請者より平均的には英語が得意である。申請者の姿勢については、他大学の後期日程や共通テスト利用型私大受験者のように別途英語の点数が必要になるか否かの影響が考えられる。また非申請者については、調査対象者が合格者に限られる以上、英語の得点が低いと不合格の可能性が高いため、分散が小さくなるのは当然であると思われる。

次にこれを学部別にみていきたい。まず表2から、みなし満点方式を申請したものについて、C 学部（社会科学系）と A 学部（医歯薬系）で最高点 197 点が最も高いのに対して、G 学部（人文系）126 点が最も低くなっている。また L 学部（文理融合系）で標準偏差が 26.9 と散らばりが大きくなっている。すなわち、これら散らばりが大きな学部においては、みなし満点となるものの、当日の共通テストの英語教科得点で出来不出来の差が大きいことを示している。

また表2から、みなし満点方式を申請していないものについては、B 学部（文理融合系）で最高点 199 点が最も高く、続いて A 学部（医歯薬系）195 点、E 学部（社会科学系）192 点、K 学部（理工農系）190 点、G 学部（人文系）189 点の順となっている。これに対して、J 学部（社会科学系）で最低点 78 点、E 学部（社会科学系）80 点、D 学部（医歯薬系）88 点、A 学部（医歯薬系）89 点、K 学部（理工農系）90 点

表 2 みなし満点方式申請・非申請（一般選抜合格者）における共通テスト「英語」得点の記述統計量（学部のアルファベット表記は竹内・永田（2021）に対応<sup>1)</sup>。学部は申請者数の降順に記載。）

	N	最高 点	最低 点	平均点	標準偏差
A 学部	61	197	115	162.3	16.9
(医歯薬系)	159	195	89	150.9	19.1
E 学部	40	194	88	156.4	23.3
(社会科学系)	394	189	80	147.9	18.4
B 学部	36	189	131	158.7	15.3
(文理融合系)	107	199	105	153.7	20.6
C 学部	33	197	90	163.4	22.0
(社会科学系)	158	184	104	154.5	16.9
L 学部	21	182	111	156.5	17.0
(医歯薬系)	73	187	88	144.7	20.1
F 学部	18	187	123	154.3	19.4
(理工農系)	449	189	92	143.2	17.2
G 学部	14	179	126	156.1	17.9
(人文系)	120	189	114	153.9	15.9
L 学部	13	181	105	155	26.9
(文理融合系)	76	192	113	149.9	19.0
H 学部	7	174	147	157.8	9.2
(医歯薬系)	52	181	96	151.9	19.2
K 学部	7	185	143	163.8	14.1
(理工農系)	221	190	90	141.8	19.3
J 学部	5	170	125	155	17.3
(社会科学系)	199	184	78	139.5	18.8
I 学部	4	159	140	152.2	8.4
(理工農系)	76	188	94	145.5	18.6
全体	259	197	88	157.8	23.4
	2,044	199	78	145.2	19.3

注) 上段：みなし満点方式申請者

下段：みなし満点方式非申請者

の順となっている。このことから A 学部、E 学部、K 学部では最高点が高いものもいるが、最低点が低いものも存在しているということがわかる。また C 学部で平均点 154.5 点、G 学部と B 学部 153.9 点・153.7 点、H 学部 151.9 点、A 学部で 150.9 点の順で高くなっている。そして B 学部で標準偏差が 20.6、D 学部 20.1、K 学部 19.3、H 学部 19.2、A 学部 19.1 の順で散らばりが大きくなっていることがわかる。ただ総体的に各学部の散らばりは、みなし満点方式を申

表 3 英語資格・検定試験の種類別のみなし満点となる条件（申請があった種類のみ表示）

検定試験の種類	条件
英検®	準 1 級以上
IELTS®	5.5 以上
TEAP®	309 以上
TOEFL iBT®	72 以上
GTEC CBT®	1190 以上

請したものと比較して、やや低く抑えられていることが把握できる。これはみなし満点方式の弊害とも言えるし、当然の帰結なのかもしれない。すなわち、みなし満点方式を申請したもので散らばりが大きいのは、当日の共通テストの英語教科で自動的に満点となることがあらかじめ決まっている中、申請しないものとの間で、テストに向かう姿勢の違いとなって現われた結果であるとも考えられる。

### 3.2 英語資格・検定試験の種類別の分析

#### 3.2.1 種類別の共通テスト「英語」得点分布（全選抜区分）

広島大学における大学入学共通テストを満点とする条件を表 3 に示す（ここでは申請があった種類のみ示す）。

この条件は、文部科学省から 2020 年に示された大学入試英語成績提供システムにおける CEFR 対照表を基準としている。この基準については、2016 年度入試以降、当時の AO 入試において英語資格・検定試験の活用を開始しているが、この時の対照表とは異なったものである（杉原・永田・高地，2019）。大学独自でこのような対応表を維持・更新するためには多大なエネルギーが必要であり、国として一定の基準が示されたことは、英語資格・検定試験を一般選抜に活用する上で、重要であった。

図 1 は 2019(令和 3)年度入試におけるみなし満点申請者（志願者）の共通テスト「英語」得点分布を箱ひげ図で示している。プロットは英語資格・検定試験の種類別で区別したものである。

また、表 4 には資格・検定試験の種類別の申請者数、共通テスト「英語」の平均点、標準偏差を与えている。サンプルサイズ(N)は、異なる選抜区分への重複申請を行った同一受験者を 1 とした実人数に対応している。表 4 から、最も多く申請されている種類は英検であり、次に多かったのは IELTS であった。図

表 4 英語資格・検定試験の種類別での申請者数，共通テスト「英語」平均得点と標準偏差

検定試験の種類	N	平均得点	標準偏差
英検®	571	160.4	18.6
IELTS®	18	155.3	18.1
TEAP®	6	174.2	13.9
TOEFL iBT®	5	175.6	13.8
GTEC CBT®	2	187.0	1.4

1 からわかるとおり，申請者数の人数には大きな差があることから，単純な比較はできないが，概して TOEFL iBT, TEAP の平均点が IELTS, 英検よりもやや高くなっている。

### 3.2.2 英検の CSE スコアに関する分析

申請者数が最も多い資格・検定試験の種類である「英検」についてより詳細な分析を行ってみたい。「英検」では，級による表示以外に，CSE (Common Scale for English) スコアと呼ばれる各技能を数値化したスコアが提示されている。そこで，この CSE スコアと大学入学共通テスト「英語」の得点との関係を試みる。

図 2 は，縦軸に共通テスト「英語」の得点，横軸に CSE スコアをとったものである。準一級の合格基準は CSE スコアが 2304 以上であることから，図 2 の左端は切断されている。

図 2 からは，

- ・より高い CSE スコア取得者では，低い大学入学共通テスト「英語」の得点である確率は減少することから，『CSE スコア』と『「共通テスト」が高得点である”確率”』との相関がみられる

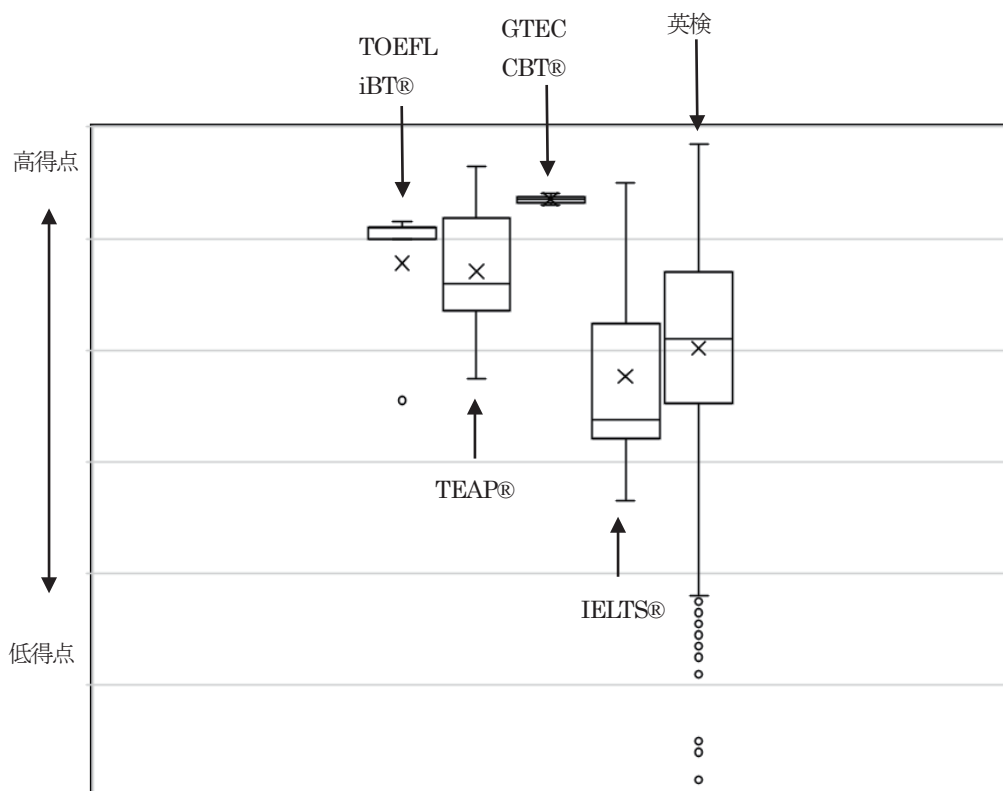


図 1 資格・検定試験の種類別で区分した場合の共通テスト「英語」得点（リーディングとリスニングの合計）の箱ひげ図（X:平均値，O:外れ値）

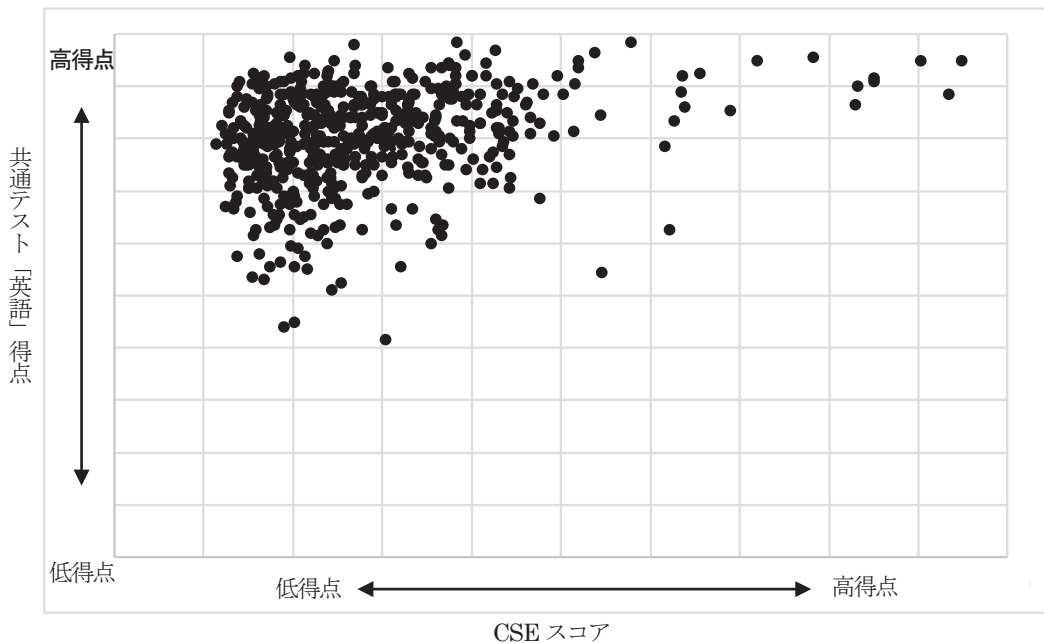


図2 共通テスト「英語」得点と英検®CSE スコアの関係 (横軸：CSE スコア，縦軸：共通テスト「英語」得点) (データは全ての選抜区分におけるみなし満点を申請した志願者)

・低い CSE スコア取得者において、共通テスト「英語」の得点が低い者が多い一方、満点に近い得点を取得している学生も存在する。したがって、CSE スコアと共通テスト「英語」の得点には比例関係があると単純には言えないが、このように一定の傾向がみられている。

ここで英検の CSE スコアについてさらに分析を行ってみたい。より早期に受験する資格・検定試験時の方が、共通テスト受験時よりも英語運用能力が低い可能性は十分考えられることから、共通テスト「英語」の高得点者が低い CSE スコアである可能性は十分考えられる。またこの場合、スピーキングを含まない共通テスト「英語」では高得点であるが、スピーキングを含む英検ではその CSE スコアが低くなっている可能性も考えられる。したがって散布図から読み取れる結果については慎重な検討が必要であるが、外れ値を除けば、CSE スコアが 2500 以上であれば、共通テスト「英語」においてほぼ 160 点 (得点率 80%) 以上、さらに CSE スコアが 2630 以上 (英検®一級に相当) であればほぼ 180 点 (得点率 90%) 以上となっている。

みなし満点方式を採用している一部の大学では、準一級といった「級」だけではなく、CSE スコアによる条件を課している場合もある。今後、4 技能の各技能別のスコアを対象としたより詳細な分析も含めた上で、CSE スコアを活用したみなし満点方式の改善の

可能性を探りたいと考える。

また、共通テスト「英語」を満点とする基準について考察してみたい。杉原・永田・高地 (2019) で示したように、入学後の TOEIC®IP テスト結果とセンター試験「英語」の相関関係に関する分析では、CEFR B2 に相当する TOEIC IP のスコアが 785 以上の場合、ほぼ全員がセンター試験「英語」得点において 180 点以上であった。ただし、逆は正しくなく、センター試験「英語」の得点が 180 点以上であっても TOEIC IP スコアが 600 以下となる学生も相当数存在した。

もちろん TOEIC IP テストとセンター試験「英語」の受験時期が異なり、かつ、受験者にとってハイステークスで自身の将来に大きな影響をもつセンター試験とそうではない入学後の TOEIC IP とでは、単純な比較ができないことは明らかである。

#### 4 まとめ

本報告では、2021 年度入試の結果について、みなし満点申請者と非申請者の比較を学部別に行い、分野別の特徴と違いについて報告を行った。いくつかの学部においては、みなし満点を申請しなかった者よりも申請したの方が得点の散らばり (標準偏差) が大きい結果もみられ、このことは受験生が戦略的にみなし満点方式を活用している可能性も示唆された。

一方、英語資格・検定試験の種類ごとの共通テスト

の分布からは、サンプルサイズが十分ではなく確定的な結論は示せないものの、共通テストの得点分布に相違がある可能性が示された。先に述べた戦略的に英語資格・検定試験を活用した受験生の影響も考えられるが、今後さらに検証が必要である。

本報告では、記述統計を中心にした報告であったが、みなし満点を利用した志願者・入学者へのアンケート等質的な分析も重要である。また、主体性等学力の3要素を潜在変数として資格・検定試験申請者の特徴に関する分析を行うことも興味深い。最後に、みなし満点方式の申請者の社会的背景（地域、経済的要因等）に関する分析は未実施である。残されている課題が数多くあるが、検証を踏まえた上での入学者選抜方法の改善に努めていきたいと考えている。

## 注

1) 竹内・永田（2021）で用いた表記を「人文系」「社会科学系」「理工農系」「医歯薬系」「文理融合系」へ書き改めている。

## 参考文献

- 中央教育審議会（2014）『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために～（答申）』2014年12月22日、15-16  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/tou shin/\\_icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/tou shin/_icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf)（2022年3月25日）。
- 大学入試のあり方に関する検討会議（2021）『大学入試のあり方に関する検討会議 提言』，令和3年7月8日  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/103/tou shin/mext\\_00862.html](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/103/tou shin/mext_00862.html)（2022年3月25日）。
- 教育再生実行会議（2013）『これからの大学教育等の在り方について（第三次提言）』，平成25年5月28日  
[https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaiei/pdf/dai3\\_1.pdf](https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaiei/pdf/dai3_1.pdf)（2022年3月25日）。
- 文部科学省（2001）『英語指導方法等改善の推進に関する懇談会（報告）』，平成13年1月17日  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/018/tou shin/010110.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/018/tou shin/010110.htm)（2022年3月25日）。
- 文部科学省（2016）『高大接続改革の進捗状況について』，平成28年8月31日  
[https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11293659/www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/28/08/1376777.htm](https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11293659/www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/08/1376777.htm)（2022年3月25日）。

杉原敏彦・永田純一・高地秀明(2019). 「国立大学の入学者選抜における英語外部検定試験の活用について—広島大学を事例に—」 『大学入試研究ジャーナル』 **29**, 234—238.

竹内正興(2018). 「共通テストへの英語民間試験導入が受験生に与えた影響—B 大学の事例からの検討—」 『大学入試研究ジャーナル』 **28**, 187—192.

竹内正興・永田純一(2021). 「センター試験の英語における英語民間試験導入の効果と課題—広島大学におけるみなし満点方式を申請した志願者分析より—」 『大学入試研究ジャーナル』 **31**, 332—337.